

新版・ゆっくり学ぶ江戸の古文書 パート2

和本の世界 1 和本で見る日本人の書物観③

誠心堂書店・橋口 侯之介

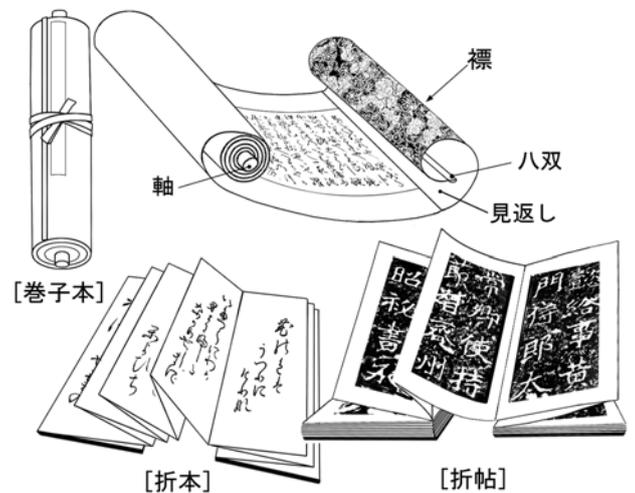
『和本入門』から

有史以来、明治のはじめころまでに日本で書かれたか、印刷された書物の総称を「和本」という。日本で書物が作られるようになったのは、およそ千三百年前と考えられている。明治の後半には洋装の活版印刷が主流になったので、それまでの千二百年間が和本の歴史である。その和本が今も数多く古書店に置かれている。日本は古い書物がよく残る国といわれる。

本は「お預かり物」

その理由は、日本人が書物を大切にしてきたからである。本は個人の所有物でなく、全体の共有物という観念が強い。そのため、次の世代に残すために、今手元にある本は「お預かり物」と考えてきた。

そこにあるのは、時代の先端や流行を行くというものでなく、百年、二百年単位で伝えるということを重視した。もっとも、これは「物之本」といわれた硬派の専門的な書物の話。大衆的な本(草紙)は、これにとらわれないで自由な発想をした。この二重性が豊かな書物文化を育み、広げた原動力でもある。



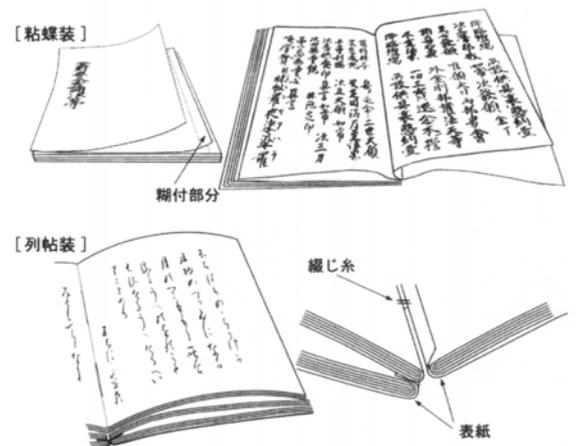
漢文・巻物

そうした観念は、平安時代からあった。初めて日本に書物が伝えられたのは中国からである。論語や千字文がもたらされたという記録もある。仏教の経典も漢文として日本に入ってきた。唐代までの中国の書物は基本的に巻物だった。卷子本(かんすほん)ともいう。そのため、平安時代の読書人(つまり皇族や貴族)は漢文で学び、卷子本にして記録を残した。それが「正規」の書物のありかただった。

ただ、日本には漢字だけでなく仮名で表現する方法も生み出した。貴族も和歌は仮名で書く。それが物語へ発展し、『源氏物語』や『伊勢物語』などが成り立つ。

仮名で書いたものは巻物にする必要はなく、自由な装訂が可能だった。

そのひとつが粘葉装(でっちょうそう 右図)という冊子本の形態である。中国では胡蝶装(こちょうそう)といった。

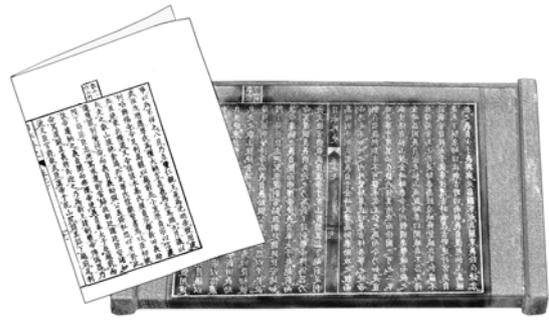


伝統的書物の手本・宋元版

巻物は保存するにはよいが、巻き戻すのに手間がかかるなど日常的に読むには適さない。そのため経典は折本(おりほん 上図)という形に変わっていった。今でも僧侶が読経に使っている。

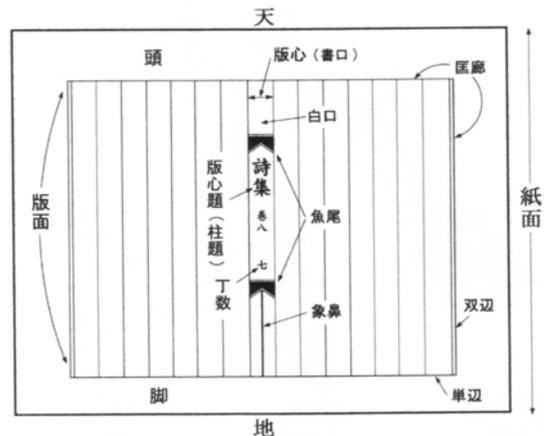
一般的な書物も、宋の時代には胡蝶装になった。読みやすくしたのである。

宋版はいろいろな意味で和本の原点のような存在である。板木(右図)による木版印刷であること、紙を一枚ずつ製本する冊子にしたこと、書体の美しさ、品格あるつくりなどどれをとってもお手本になるものだった。



和本や中国古書の印刷様式のことを版式(はんしき)というが、この宋版と元版(合わせて宋元版という)でそれが形成された。これ以降千年近い本の基本的な様式である。仏書・漢籍・医書など物之本は伝統の様式を守るものである。

右図は版式のもろもろの要素を示した図である。中心を版心あるいは柱といい、その中にある黒い亀甲のような模様を魚尾という。紙を折るときの中心線に使う。



書き入れという伝え方

和本は、文字面が天地(縦)の中央になく、下に重心がくる。頭のところに空きを用意して、そこに書き入れができるようにするためである。上図では、本文を囲む罫線を匡郭(きょうかく)といい、その上の欄外を首とか頭と書いて「かしら」という。ここに注釈などを入れるのを頭書(とうしょ)といい、別名鼈頭(かめづと)ともいう。江戸時代にもよく使われたことばである。鼈(かめ)というのは中国伝説上の大亀のこと。この頭上に乗ることができるのは、中国の任官試験である科挙(かきよ)で一番になった一握りの秀才だけだったといういわれがある。



和本には歴代所蔵してきた人によって、いろいろなことが書き込まれているものである。たんなるいたずら書きは減点だが、多くは有益な注釈文が入っている。したがって和本では書き込みといわず、書き入れといって、これがあるのはむしろプラスと考える。それには句読点、校合(きょうごう)、訓点、注釈、朱引(しゅびき)などいろいろな方式があり、それぞれ決まりがあった。たとえば、朱引は訓点と並んで、漢文を読むために役立つ書き入れで、固有名詞がわかるように線を引くのである。そのためのルールが室町時代頃から確立する。

朱引歌 右所、中者人乃名、左官、中二者書乃名、左二者年号
すなわち、文字の右側に朱線を引くときは、それが所(地名)であることを示し、文字の中央に乗せて線を入れるのは人名、左側は官職名、中央の二重線は書名を、左側の二重線は年号をあらわす。

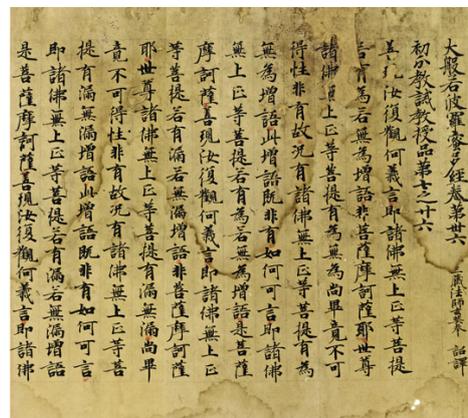
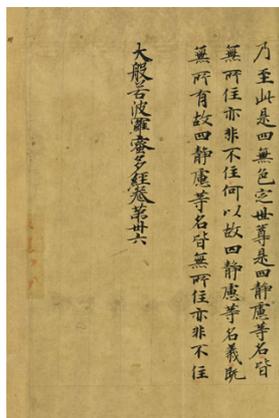
『国書総目録』の意義

慶応三年(一八六七)までに日本人が編著した書籍およそ五十万点を辞典形式で収めた総合目録。書名・著者名・成立年などのほか、それぞれの本の所蔵者のリストが載っていて、書誌の基本情報と本のありかがわかるようになっている。

本巻八冊、著者索引一卷合計九冊構成で、昭和三十八年(一九六三)から岩波書店で刊行された。本来なら国家レベルで実行すべき大事業を一民間出版社の力で行ったのだからその功績は大きい。

中国文学の大家・吉川幸次郎先生は、この50万点の多さに驚き、中国よりずっと多いことを述べている。中国では実際につくられた本の数日本より多いだろうが、保存の過程が異なる。日本人はどのようなものでも本は大事にしてきたが、中国では「正しい内容」「権威ある書物」が保存され、そうでない二流三流の本は残されない傾向がある。

現在は、『国書総目録』の全内容がインターネットで検索できるようになって便利である。和本を手元に置いたらまずこれで調べるのである。



自然の素材

和本はすべて自然素材でできている。和紙と墨は、千年以上の寿命があることが、もう証明されている。奈良時代の古写経が、今でも古書の市場に出てくるが、美しい姿を保っている。劣化しないのである。

平安時代・鎌倉時代の書物もたくさん残っている。

楮を原料とした紙(楮紙 ちよし)は、大量生産が可能だったので、さまざまな用途に用いられた。しなやかで軽く、それでいて丈夫である。折っても復元性があり、長年の湿度の変化にも対応する。

日常的に使える書物である。和本は畳や机の上に広げて置いて読むものである。

雁皮を原料とするのは古くは斐紙といい、室町時代頃から鳥の子というようになるが、光沢があり墨の乗りがよく、美しい紙である。ただ手間がかかる製法のため、上等な本や絵巻物に使われた。しかし、折り目ができると復元性がない。この紙の本は大事に扱う必要がある。



保存のために

フルホンシバンムシ

本の敵は、地震や火災、戦災などからの被害も大きい。しかし、最大の敵は「無知」。こんな古い物、きたないといって捨てられてしまうこともある。もうひとつ、自然素材である和本は虫が付きやすい。

シバンムシ科というのに属する虫の幼虫(右図)が和紙を好んで食べるのである。油断するとどこにでもいるので、本に入りこみ卵を産む。そのウジ虫が紙を食べる。親虫でも2ミリ位と小さい。幼虫は3ミリくらい。これを防ぐために昔から苦労してきた。一番良いのは、春から夏にかけて虫干しをすること。湿気対策 になり、虫がいないかのチェックができる。その後密閉する。木箱に入れて樟脳などの防虫剤を同封する。最近は中性紙できた箱が売られている。



不幸にして虫がいたら、丹念に追いますが、奥の方にいるのはなかなか見つからない。そこで本をラップで包み、電子レンジでチンするのは、案外よい手である。

参考文献

橋口侯之介『和本への招待』(2011年、角川選書)

同 『和本入門 千年生きる書物の世界』(2005年初版、2011年平凡社ライブラリで再刊)

同 『江戸の本屋と本づくり 続和本入門』(2007年初版、2011年平凡社ライブラリで再刊)